

氏名	山 崎 広 一		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	博乙第 2022 号		
学 位 授 与 の 日 付	平成元年 6 月 30 日		
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）		
学 位 論 文 題 目	慢性関節リウマチ長期観察例の臨床的研究		
論 文 審 査 委 員	教授 太田善介	教授 折田薫三	教授 寺本 滋

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

慢性関節リウマチの系統的治療が行なわれた場合の長期経過（調査時罹病期間平均 22.6 年）について検討した。調査時の機能障害が class I・II の 19 例を軽症群とし、class III・IV の 23 例を進行群としてその経過を比較した。軽症群と進行群間で有意差のない項目は、性別、調査時罹病期間、当科初診までの罹病期間、当科での追跡期間、初診時の機能障害、発症部位、初診時 ARA 基準、初診年度の RA テスト、初診時の赤沈値、最近 1 年間の IgM, RA テスト、RAHA であった。進行群との関連が強いものとして、発症年齢が 40 才以上、経過型が progressive の例、全経過中の赤沈値の平均値、最近 1 年間の赤沈値、CRP 値、IgG, IgA の高いものであった。両手 X-P 上の変化は Larsen 分類を基本とする Scott の score からみると、全経過中の赤沈値の平均値、最近 1 年間の IgA の平均値の高い場合、抗リウマチ薬の無効例、金剤を始めるまでの罹病年数の長い場合に強い。金療法は軽症群と進行群に同程度に施行されており（投与期間の平均は 128 ケ月と 121 ケ月）、金剤の有効例はど軽症群に属する例が多い。一方、機能予後は金剤の有効期間と最も相関関係が強かった。抗リウマチ薬の効果がなく、ステロイド剤より離脱できない例は機能予後が悪かった。金療法の副作用は重篤なものはなく、連続使用量 1 g までは皮膚症状、2 g 以上では蛋白尿、尿潜血にて中止になることが多かった。手術的治療では滑膜切除術は 17 例 31 関節に行なわれ、手関節に良い結果が得られているが、RA の経過に及ぼすほどの効果はない。関節形成術は 13 例 29 関節に行なわれており、下肢の関節形成術を行なった 9 例中 8 例に歩行能力の改善が得られた。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は慢性関節リウマチの系統的治療が行われた場合の長期経過（調査時罹病期間平均 22.6 年）について検討したもので、調査時の機能障害が class I - II の 19 例を軽症群と

し，class Ⅲ－Ⅳの23例を進行群としてその経過を比較したところ軽症群と進行群間で有意差のない項目は，性別，調査時罹病期間などで，また進行群との関連が強いものとして，発症年齢が40才以上，経過型が progressive の例，全経過中の赤沈値の平均値，最近1年間の赤沈値，CRP，IgG，IgA の高いものであった。金剤の有効例ほど軽症群に属する例が多く，下肢の関節形成術を行った9例中8例に歩行能力の改善が得られた。これらの結果は臨床的に価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。